
MAGICAMAN X3 -SAYAKA'S ATTACK-

禍原 無尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAGICAMAN X3 - SAYAKA'S ATTACK -

【Nコード】

N7770T

【作者名】

禍原 無尋

【あらすじ】

ひたすら誰得俺得の組み合わせです。あくまでもネタ小説です。何卒寛大な目でご覧頂ければ。（ブログにも掲載予定？）

A part：ONI・少女が鬼に到るまで・

狂気の魔法少女と化したさやかに敗れ、捕らわれたまどかとほむら……。全見滝原市民の希望たる二人を、さやかはクリスマスの日に公開処刑にかけようとする！ 無力さに嘔吐さえしながらも、ママが命と引き換えに取り戻したまどかのソウルジェムを手に、まどかの母・詢子の手を借りながら処刑場に向かう杏子。だが、魔女化寸前のさやかに二人は追い詰められてしまう……。まどかとほむら、二人が処刑される日付変更の瞬間まで、あとわずか――。

「さやか……あんたは！」

「ククク……あたしは今、まだ魔法少女でいられることに心底感謝してるわ……。そう、感情を維持できていることに……。でなければ、絶望のドン底で足掻いている愚か者を見て悦に入ることもしかないからねえ――！」

くずおれた杏子の呻きに、そう返すさやか。彼女が見ていたのは、足を引き摺りそれでも、磔られドリルに貫かれんとしている愛する娘の元へ向かおうとする母の姿であった。その手に握られたのは、娘の魂たるソウルジェム――。

「くっそっ……。諦めない……。届けるんだ……。あの子のところに……。ママちゃんの……。杏子ちゃんの……」

みんなの想い！

詢子は、娘の魂を娘の軀に向けて投擲した。日付変更数秒前の刹那。投げられたジェムがまどかの軀に触れたのと、全てを原子分解するドリルがまどかとほむらの頭蓋に触れたのとは、ほぼ同時であった。

日付が変わった瞬間、赤い閃光が血煙のように舞い、轟音爆煙と

ともに弾けた。

「メえええ〜りいいいいクリっスマああ——スううっ！ ひゃ——
っはっはっはっはっはっはあ——っ！」

目を血走らせたさやかの哄笑が夜天高く響いた。吊り上がった口元は己の勝利を確信してのもの。

だが。

「！——！」

さやかの目に映ったのは、五体満足なほむらと先の消し飛んだドリル、そして粉々に砕けたまどかの十字架だった。

「さやかちゃん……まだ魔法少女でいられることを喜んでいたね……けどすぐに魔法少女になったことを後悔させてあげる……人間だから感じる事が出来る恐れでね」

煙とともに漂う声。後ずさるさやか。

「まったく、イキだねえ……こんな日にさあ……やってくれるよ——今日は……」

晴れていく煙の向こうを見ながら、詢子は呟く。

「ゼロ年代の救世主^{メシア}の誕生日さ……！」

そこには、弓矢をつがえたピンクの魔法少女の、まどかの勇姿があった。

「聞こえたよ……お母さんの声……マミさんや杏子ちゃんの、みんなの声……」

だから蘇ったの。応えるために。戦うために。守るために……！」

「まどか……！」

声にまどかが振り向けば、そこには長い黒髪の親友の姿。縛を解かれ杏子に支えられたほむらは、やつれながらもまどかに笑みを向けていた。

「こっちは大丈夫よ……貴女は思い切り戦って！」

笑顔で頷くまどか。そこには、ともに戦う仲間の絆があつた。

「何よ、「仲間」みたいにさ……仲間・ナカマ・なかま……ナカマナカマナカマナカマナカマナカマ……かああああっ、ジェムの穢れが逆流しそうになるほど甘ったるい言葉だわ！」

馴れ合うくせにあたし一人救えない……諸とも消し飛ぶがいい！」

叫んださやか放つ魔力光が、処刑場を大爆発で包んだ。吹き荒れる爆風に、跳ね飛ばされる詢子。その身体を、魔力で天を駆けるまどかが受け止める。小さな軀で杏子をも抱えたまどかはなんとか安全な足場に着地した。隕石のように降り注ぐ燃える瓦礫。その一つがまどかたちの前に落ちる。

それは、黒く焼け焦げたほむらの盾だった。

「ほ、ほむらちゃん……！」

まどかが手を伸べると、盾は灰と化して崩れ、燻る爆煙とともに消えていった。

「ほむら……そんな……」

「ふうん、結構生き残ったわね」

愕然とする杏子を余所に、さやかは悪魔の笑みで嘲笑う。

「ほむらは？ アイツ死んだの？ せっかく助けてもらったのに、芸の無い奴ねえ——」

「……！！！」

怒りに燃えるまどかがさやかを睨め付ける。

「いい目じゃない、まどか……怒りと憎しみに吞まれて、あんたも魔女になればいいのよ！ 嫌ならあたしの使い魔、倒して見せなさいよ！」

もはや魔女となりつつあるのか、さやかが放った魔力光から、恭介と仁美に似た使い魔が生まれ、まどかに襲いかかる。使い魔たちから撃ち出される無数の光弾。

その全てを、気合だけで受け止め弾き飛ばすまどか。

「いいわ……その力！ その力を全て、アイツの手に……！」

歪んだ笑みを張り付けたさやかの顔を見据えるまどか。弓矢を構え、力を解き放つ。

放たれる極大の魔力光。

その輝きは恭介・仁美似の使い魔を消し飛ばし、その向こうのさやかも——。

「さやかああああっ！」

杏子の叫びは、激しい爆発にかき消される。またも降り注ぎ積み上がる瓦礫の山。

しよげる杏子の、肩を支える詢子。まどかは厳しい顔を戻せずにいた。

「素・晴・ら・しい！ 素晴らしいじゃない、まどか！」

瓦礫の山を弾き飛ばしさやかが立ち上がった。血みどろになりながら、それでも狂気の笑みを張り付け続けている。

「その力、魔女になれば宇宙にどれだけのエネルギーを与えるか……さあ！ 早くあんたも魔女に……！」

もはやさやかとも思えぬ言動に、さすがの杏子も呆けてしまっている。

「さやか……何がお前をそんなにしちまつたんだ……！」

「キュウベえ——ねっ」

呟くまどか。

「キュウベえに吹き込まれたのね」

「そんな……アイツはもう前にほむらが穴だらけにしたはずじゃ……」

「フッフ……あの程度でアイツが死ぬと思うの？ キュウベえは生きてるわ！ 生きて、全ての魔法少女を魔女にし、そのエネルギーで宇宙のエントロピーを制御しようとしている！ まもなくアイツは目覚め、全ての魔法少女を絶望に叩き込むわ！ あたしはその礎になるためなら、死をも恐れない！」

もはや「もう死んでいる」などと無粋な言葉は不要だった。今のさやかがこの上魔女になれば、かつての活発だった彼女の心など、失せて消えてしまうことは明白だった。

「さやかちゃん、止めてえええっ！」

まどかの叫びが届くはずもなく、さやかは自身の黒く染まったソ

ウルジエムを高々と掲げる。

「そうよ……これで、振り向いてくれない恭介とも、恭介を奪った仁美とも、助けてくれなかったお父さんお母さんとも、まどかや杏子やほむらとも、みんなお別れ。みんな死んで、お仕舞い。苦しいことは何もない。なくなる。そう、あたしさえ、死・ね・ば……」

気付けば、さやかは杏子の膝の上にいた。死後の世界かと思ったが、二人とも傷付いているあたり、どうやら違うらしい。みれば、杏子は自分のジエムをさやかのジエムに押し付けている。

「あたしのジエムと魔力で、あんたのジエムの穢れを抑えてるんだ」
「バカ！ それじゃあんたのソウルジエムが……！」

「平気だよ。」

あたしたち、仲間だろ？ これくらい、へでもないさ」

「……あれだけのことをしたあたしを、まだ仲間だって言うの？
何をそんなに……そんなに死ぬのが怖い？」

「ああ。こんな軀だって、まだ消えたくない。やりたいことだってある。それに……、

何より、友達が助かる。お得この上ないだろ？」

さやかには、次げる言葉がなかった。ただ俯くより他になかった。そんなさやかを、まどかも詢子も見守っていた。

「杏子……まどか……あたし、元に戻るかな……」

「大丈夫だよさやかちゃん。いつものさやかちゃんの、優しい心に

に従えば、きつと……」

「まどか……ッ！」

「さやか……グッ、ガアアアッ！」

杏子の頭をさやかの手が掴んだ、突然に。

「キヒヒいいいつ、死ね……死ね……、ザァクロのようにかち割れるお！」

舌なめずりで哄笑うさやか。貼り付いた狂気に、しかし苦しみなから、杏子を離して後ずさる。

「杏子……ダメ……戻れ……な……い……」

「さやか！」

近づこうとする杏子に、さやかは剣を振り上げ、

「さやかちゃん！」

突き刺し、砕け、朽ちる音。

杏子に、剣は刺さらなかった。さやかの剣は、真っ直ぐに自身のソウルジェムへ向かい、貫き、破碎していた。自分の胸と魂を剣で縫い止め立ち尽くしたさやか。

「——魔女化してみんなを絶望に落とす前に、自分で落とし前を着けたんだね。みんなを守るために。かつて信じた正義を全うするために。」

自分の心に、従っ……た……んだ……な……さ、

さああああやかあああああつー！」

杏子の慟哭が天を衝いた。拳を地面に叩き付ける、何度も、何度も、血みどろになるのも構わずに。

「何でだ！　なんで死んじまっただんだ！」

泣きわめく杏子を詢子が押さえつけんとする。

「杏子ちゃん、そんな言い方じゃ、さやかちゃんが無駄死にしたみたいじゃないか！」

「そうだよ！　無駄死にだよ！　生きてさえいれば、やり直しができたのに、逃げ出しやがって……！」

そんな弱虫だったのかよ……ッ！」

高々と泣き声を上げ続ける杏子。詢子は押さえるのが精一杯だ。

「ちよつとまどか、あんたも何とか言ってやって……」

その瞬間。

母は、娘に、恐ろしいものを見た。顔は背けられて見えない。だがその向こうに、赫怒に燃える、角を生やした化け物のような。鬼……いや、魔女？

瞬きの間に消える幻。娘の顔は見えず、その目線は遠くを見つめるまま。

その向こうに広がっていく暗雲。稲光。ほむらが予言していた、ワルプルギスの夜が近づいている。恐らくは、そこにキュウベえも。

やがてまどかは、暗雲へ歩を進める。

「行くんだな」

詢子の声に足を止めるまどか。

「止めないぞ。でも、あんたが助かったのは私や杏子ちゃんたちの詰めのおかげなんだぞ？」

だから……ちゃんと帰って、みんなにありがとうを言いに来な」

母は娘を見つめた。振り返る笑顔と返事を待った。

まどかは、背を向けたまま。振り向かない。

「約束は……できないよ……」

「……この……バカ娘ええっ!!」

詢子の、母親の叫びさえもう届かないのか。まどかは暗雲立ち込める彼方へ歩んでいく。

——後半へ続く！

Part: WITCH 魔女に至った少女の瞳

黄昏の街に、人影はなかった。災害警報で避難勧告が出され、人々は見滝原の街から逃げ出していた。誰一人いない街並み、ビル街を歩くピンクの少女——魔法少女まどか。俯き加減で歩く彼女の顔は、表情は、例えそこに誰かがいたとしても窺い知れなかっただろう。

そんなまどかの前に、音楽が降ってくる。暗雲の彼方より迫る、鍵盤を弾く、美しくも激しい調べ。

「ピアノ、というらしいわね」

降り注ぐ旋律とともに、女声が舞い降りる。

「弾いて出る音の組み合わせで、芸術と呼び賞するそうね。」

でも、そんなモノはなんの意味も成さないわ。

魔法少女は——魔女は、人々を呪い絶望を振り撒くためだけに存在するのだもの。

この私が……そうであるようにね」

まどかの目の前に、それは現れた。逆さまのピエロット・ガール。青いドレスのスカート、裾の広がったその内側には、幾重にも積み重なった齒車。赤い口元いっぱいにかかれた笑み。

その魔女は名を、ワルプルギスの夜と呼んだ。

「楽しい破壊と終末の絶望の後に立っているのは、全ての魔法少女の絶望から生まれてきたこの私よ」

ワルプルギスの夜がもたらす破壊は圧倒的であった。道路は割られ足場のない大地が剥き出しとなり、ビルは根こそぎ破壊され、次々と瓦礫の山脈が積み上がっていく。街は間もなく紅蓮の炎に覆われ、その間を駆けるまどかの肌を焼いた。まどかの放つ矢や魔力光は軽々と弾かれ、お返しに浮かび上げられた瓦礫の大質量が雪崩れ落ちる。

「素晴らしい力ね、鹿目まどか！」 魔力を足に纏い、瓦礫の洪水を縫って天を駆けるまどかへ、ワルプルギスの夜が言い放つ。「その強すぎる力——貴女も魔女になったのかしら?!」

ワルプルギスの夜の頭上に舞い上がるまどか。

「そうよ。絶望した魔法少女の宿命——私は「魔女」になった。魔女を倒すため「魔女」になった！」

まどかは引き絞った弓矢から極大の魔力光を放つ。巨きく、速い。魔女の巨体に逃げられるはずもなく、だが逆さまのピエロが消える。

「貴女の「魔女」はその程度？」

魔力光が瓦礫の山を一つ消し飛ばした。その間にワルプルギスの夜はまどかの頭上に現れている。

「これが私の力よ。私の内に巢食う、数多の絶望の、最強の魔女の力よ！」

ワルプルギスの夜がまどかに落下する。歯車が、巨体が、大質量

が、まどかの小さな軀を押し潰す、瓦礫もろとも。
絶叫のごとき崩落の響き。街の残骸の中に消えるまどか。

「所詮は一夜漬けの「魔女」だわ！ 生まれついでの絶望の塊には、到底叶わないのよ——！」

壊滅した街に轟く高笑い。しかし、ワルプルギスの夜の足元が、桃色の光に包まれる。閃光が瓦礫を吹き飛ばす。

舞い上がったビルの残骸の中を、ピンクの影が疾走る。再度ワルプルギスの夜の頭上を取ったまどかは、両手に魔力を纏い、魔女の巨大な顔面に殴りかかる。

「なりふり構わない攻撃、“らしく”なってきたわね！」

だが巨体にまどかの細腕では無力なのか。殴打を浴びながら、ワルプルギスの夜は変わらぬ笑みで嘲笑う。

「ごたくは…… いらない……！」

まどかは殴りつける拳を早く、速くする。数百数千の拳撃が、ワルプルギスの夜の顔面を少しずつ歪め、ヒビを入れていく。

「力も絶望も関係ない。「魔女」なんて——魔法少女なんて、この世にいてはいけないのよ」

「……ならば何故、お前は存在する！ 何のために魔法少女になった！ お前も自分の願いを叶え、やがては絶望に至り魔女となるために、魔法少女になったのだろう！」

「私の、願い……」

ワルプルギスの夜は、その時初めて、俯いていたまどかの顔を見た。

「「魔女」を滅ぼすことだ」

その表情、詢子がいれば本当に我が娘のものかと疑っただろう。見開かれた瞳は何者も見えていない、いや、そこに宿る己の願いしか見えていないかのよう。歪んだ口元は牙を剥き、その奥は暗黒が広がるかの如し。

「「魔女」を……滅ぼす……？」

殴打の中、ワルプルギスの夜は思考を空転させた。彼女にとって「魔女」とは具現化した絶望であり、永久に潰えぬ概念であった。そしてその機能は、あらゆる全てに絶望を振り撒くこと以外になかった。

（彼女の言う「魔女」とは、何だ？

私の魔女とは、違う。

彼女の「魔女」は、絶望を、求めてはいない——）

ピンクの「魔女」が、ワルプルギスの夜を見つめる。深い虚のような、その相眸——。

「……そんな目をするなあ——っ」

ワルプルギスの夜は殴り続けるまどかをね飛ばした。宙を舞うピンク色に、瓦礫を浮かび上げて投げつける。

「私は魔女だ！ 全ての絶望を褥に生まれた魔女なんだ——！」

絶大な力を振るう最強の魔女は、既に恐慌の内にあった。狙いもなく飛ぶ残骸を、ピンクの輝きが縫って舞う。

「くうだいてやるう——」

ついにワルプルギスの夜は自身の腕をまどかに伸ばした。一度はかわしたまどかだが、二度目はなかった。首を除く全身を巨大な魔女に掴まれる。

骨と肉の割り砕かれる響き。膂力はさして要しなかった。
「軀が潰れた！ これで……」

まどかの見開かれた両眼が、ワルプルギスの夜を射抜いた。

握られた巨大な拳の隙間から、ピンクに輝く翼が巨しく広がる。
まどかの翼——羽ばたきが彼女ごとワルプルギスの夜を天へ引き上げる。高く、暗雲を越え、成層圏の彼方まで。

「バカな！ 動けるはずが……っ！ どこまで昇る……！」

周囲に空気がなくなった頃、まどかは巨大な手を振りほどいた。
魔力が粉々になった骨を、押し潰された肉を再生する。

そしてまどかは、ワルプルギスの夜を地球へと押し落とす。

魔女の巨体に等しい膂力が、大気圏へ魔女を押し込んでいく。赤熱化し焼け爛れていく肉体に悶えながら、ワルプルギスの夜が叫ぶ。
「私は魔女だ！ 全てに絶望を振り撒く魔女だ！ だが貴女の「魔女」はなんだ！ 貴女は、何を望んで——」

最強の魔女の絶叫は、全てを焼き尽くす大気圏の摩擦熱の中に消えていく。

（——そうか、鹿目まどか）

焼き消されていく意識の中で、ワルプルギスの夜はようやく気付いた。

（私もキュウベえも認めない。

システム

全ての魔女とそれを生み出すものを滅ぼすつもりか。

そうして全てを滅ぼした後、最後に自分自身をも滅ぼす「魔女」。

「破滅」のための「魔女」――）

「待っていてなさい、キュウベえ」

瓦礫と炎の燦る見滝原の街で、修復した軀を起こしてまどかは呟いた。

「次は、あなたの番よ――」

その目は彼方を見据え、背後に積み上がった齒車と青いドレスの巨大な消し炭の山には、もはや視線さえ向けなかった。

「近づいてくる……あの娘が……一歩ずつ、確実に……」

闇の中、白く浮かぶそれは一人呟く。遠く視線の彼方には、燃え盛る街並みと巨大な魔女の亡骸、そして、戦場を後にこちらに向かうピンクの少女の姿。

白いそれは身震いすると、小動物のようなその軀を変形させた。首と胴の間から肉と筋が滝のように流れ出で、瞬く間に白い筋肉を剥き出した化け物の肉体が現れる。魔法少女の絶望が産んだエネルギーで造られた戦闘用のボディ。

「さやか……最期まで道具としての機能を全うしてくれたね。君の絶望のおかげでこの軀を用意できた」

迫り来る、今や最強の魔女と化した少女を待ちながら、キュウベえは笑う。

「後は君の到着を——君の絶望を待つばかりだよ、まどか」

まどかは独り歩いていた。キュウベえの居る、その気配を放つ、今は誰もいない、その場所へと。ヒールの足音だけが高く響いている。

ただ黙して進むまどかの目線に、見覚えのあるものが現れた。一人いない街の通りに、似つかわしくない黒く小さな塊。

「あれは……ほむらちゃんの拳銃……」

転がるベレッタの前には、鮮血の血だまりがあつた。まどかは跪き、手を伸べる。触れた血液はまだ温かった。

「ほむらちゃんの血——よかった、生きててくれたんだ……」

安堵とともに、まどかの表情が平素の穏やかな笑顔に戻る。「でも——」それも刹那のことだ。

「後は頼むね。」

私はもう、戻れないから」

立ち上がりながら、まどかはベレッタを拾い上げる。

「拳銃は手向けとして受け取っておくね」
一人眩き、まどかはベレッタの遊底スライドを引いた。

——完結編に続く！

C p a r t : S H I N E 少女が概念を越えるまで

まどかは辿り着いた。白い悪魔の居るその場所——見滝原中学の校舎へと。人はいない。甚大な被害が見込まれたそこは本来の避難所としての機能は果たされず放置されていた。立ち込め続ける暗雲の下、まどかは地を蹴り跳ねる。魔力を足に纏い飛ぶ、屋上まで。

さやかと毎日戯れたその場所に、白い化け物はいた。

「待っていたよ、まどか。君が来るのを——君が絶望に堕ち魔女と化して消え去るのを」

「絶望に堕ちてるかどうかなんて知らない……でも消えるのは私一人じゃない——

キュウベえ！ お前もだ！」

まどかの見開かれた眼に射抜かれながら、キュウベえは赤い両眼を爛々と輝かせた。小動物のぬいぐるみのような頭部から、白い筋肉を剥き出しにした胴と四肢を生やした異形。悪魔は悠然と前に出る。

「これから僕は全ての魔法少女を絶望に堕とし、そのエネルギーで宇宙のエントロピーを制御するのだから」

「——お前は私と一緒に滅びるんだ！」

まどかは弓矢をつがえ魔力光を放つ。光条を泰然と受け切るキュウベえ。無傷の白い筋肉にまどかは間髪入れず矢を連射する。キュウベえもまた後ろ髪のような尻尾を振るい紫の魔力で光弾を放った。ピンクと紫の応酬。宙で衝突し合い弾ける矢と弾。屋上を駆けるピ

ンクと白は、互いの隙を狙い続ける。

「君の力はさやかとワルプルギスの夜で検証済みだ。この数と速さなら、君は相殺しきれない」

無数の魔力の火花で散るピンクと紫の隙間を、縫って光弾がまどかを襲う。紫の光に包まれたまどかの、軀が刹那、紅蓮の炎に焼かれる。まどかの喉が声にならない叫びを上げる。

「この光弾は触れば、大気圏の摩擦熱が比にならない温度になるよ」

屋上の床やフェンスが液を滴らせ溶ける。それでもまどかは、キユウベえに向かいにじり寄っていく。

「一人では……死なない……！」

紫の光弾をもはや避けることすらせず、まどかは弓矢を放ちながら、全身を燃やしながら、キユウベえに向かっていく。

「私と一緒に燃え尽きろ、キユウベえ——っ！」

炎を纏い、鬼気迫るといふ形容では事足りない形相で迫るまどかに、キユウベえはその腕を差し向ける。

「一人旅が寂しいのかい、まどか」

白い筋肉が、伸びた。一瞬で彼我の距離を縮めた拳は、まどかの顔を正面から殴り潰す。骨と肉のひしゃげる音。鮮血が飛び散り、白い拳を真っ赤に染める。大きく仰け反るまどか。

しかし倒れない。足を踏ん張り、腰で堪えて、まだ立っている。
見開かれた目で、キュウベえを見るまどか。

「私と一緒に地獄へ堕ちろ、キュウベえええ……」
焦点さえ定まらなくなった瞳を揺らしながら、血だらけの顔でまどかは声を漏らした。

「さすが最強の魔法少女だね。宇宙を支えうる希望を秘めているだけのことはある。やはり君を絶望に堕とせば、宇宙のエントロピーは制御可能だ」

ふらふらと近づくまどかを表情無く見やり、キュウベえは歩み寄った。今にもくず折れそうなまどか、その柔らかい腹を、筋肉で固めた白い拳で殴り上げる。口腔から大量の血を撒き散らしながら、まどかの軀が宙を舞っていく。

自らのぶちまけた血だまりに打ち付けられながら、まどかは屋上の床に転がった。キュウベえはさらに近づいていく。止めを刺さんと。

仰向けになったまどかの、手がフラリと動いた。懷に伸びた手は、胸元から黒い塊を引きずり出す。

「それは……ほむらのベレッタ……!!」
「さあ! 一緒にイこうよっ!

キュウベええええ——っ!!」

狂気の相貌で拳銃を向けるまどか。拳を打ち下ろすキュウベえ。

白い拳がまどかの額を割り砕き、放たれた銃弾がキュウベエの顔を撃ち貫く。

フルオート
完全自動で吐き出された弾丸の槍が、キュウベエの頭部を、本体を、チーズのように穴だらけにした。

首だけで仰け反ったキュウベエは、その白い筋肉の軀を解れさせ、筋と肉を撒き散らしながら、本体を転がらせた。穴だらけのぬいぐるみが、打ち据えられコンクリートの上で白く、発光していく。

屋上を大爆発が包んだ。建物が歪み崩れる。倒壊寸前のそこから離れ、辛くもまどかは校庭に着地した。

「あの爆発……道連れにするつもりだったのかな……エントロピーの制御に執着していたアイツが……」

一人ごちて、しかしまどかは感じていた。消えないキュウベエの、不透明な悪意の気配を。

「そうか……ヤツはまだ……」

大地が揺れ動く。破壊された校舎が倒壊していく。その残骸の滝の中、ほの光る赤い両眼。

「——来たっ」

紫の光弾がミサイルのようにいくつも飛来する。落着し地を抉り弾ける紫光。巻き上がる土煙を突き抜けながら転がり出たまどかは、その向こうに現れた巨大な影を睨め付ける。

「やはり生きていたのね」

「当然さ。僕は因果という概念の一端だからね。機能を果たすまでは何度でも甦るよ」

土煙の中から、キュウベえの頭が逆さまに現れた。爛々と光る赤い眼。背後に広がる新たな軀は巨大な、巨大な巻き貝であった。アンモナイトが横に連なったような殻は、冷えた熔岩状の歪な表面で覆われ、そのあらゆる箇所から長短大小無数の触手が生えている。何処かの世界の旧支配者を思わせる異形で、キュウベえは相変わらずの口調で嘲笑う。

「今この星にある僕たちの軀を、さやか of 絶望で縫い上げたこの、『インキュベーター・ガタノゾーア』で、今こそ君の希望を砕いてあげよう」

消えない暗雲の下、キュウベえが、インキュベーター・ガタノゾーアが高々と吠える。

「何度言ったらわかるの……。
お前は私と一緒に滅びるんだ——っ！」

微塵も怯まず、まどかもまた吼えて天を駆け、弓矢を放った。今までに無く濃いピンクの光が、上空から怪物の軀、キュウベえの頭部を捉える。分厚い魔力の障壁で、その渾身の一撃を弾くインキュベーター。

「初見で頭部を弱点と見抜く、流石の眼力だね。『魔女』になりし者の本能かい？ でも今の君は無力な愚か者……力の差がわからない」

「『力』の差は私の『命』で埋めてやる！」

また殴りかかろうとでもいうのか、魔力で加速してインキュベーターに突撃していくまどか。

「悲しいかな……その程度で埋まる實力差ではないさ——っ！」

インキュベーター・ガタノゾーアが、そのキュウベえの頭部から魔力光を放った。射線上の全てを紫に塗り込める閃光。大気圏までも貫いていく光の奔流の中に、まどかも呑み込まれていく。

「埋めて……み……せる……」

抗い続ける声も、まどかの軀ごと光にかき消されていく——。

肉も筋も骨もバラバラにされて。

まどかはその軀を失った。

だが、彼女の心は、魂は、生きていた。

海に。山に。空に。星に。生き続けていた。

全ての生命と優しさ、そして願いの生まれる時と場所に。

それはたった一人の願いでは成し得ないものだったのかもしれない。

数多の少女たちが願い、そして一人の少女が祈った、希望という名の奇蹟――。

「さあ、これからだ！ まどか、君の壊れた希望とソウルジェムは、絶望のグリーンフシードとして生まれ変わる！ 君が最大最悪の魔女として復活する時、その時こそ――！」

高々と吠え声を上げ続けるインキュベーター・ガタノゾーア。

だが、彼の目の前に舞い降りたのはグリーンフシードではなかった。

柔らかくも強い光を放つピンク色の――まどかのソウルジェム。

赤い眼を見開くキュウベエの驚愕を、砕くようにジェムの光が――際強く輝く。

広がるピンクの光の翼。

その輝きに包まれて、少女の身体が生まれ出ずる。

ピンクを金色に染め変えて光輝く、その少女の名は、鹿目まどか。

数多の魔法少女が願いに込めた希望が、今、実体化したのである――！

キュウベえは赤い眼を驚愕に見開いたまま、舞い降りる少女を見つめていた。まどかであることは確かだが、あり得なかった。あの攻撃の中でソウルジェムが砕けぬことなど、決して。だが、まどかは確かに目の前にいた。

「私……私は……」

俯いていたまどかが、その顔を上げる。

「生きたい……」

まどかは穏やかな表情で涙を流していた。絶望も狂気もなく、柔らかな笑みさえ湛えて。

胸元のソウルジェムは、黒く染まっていた。だがキュウベえには見て取れた。あれはグリーンフシードに至る絶望の闇の色ではない。内側に星々の輝きを秘めた、言うなれば宇宙の色――。

「何だ……何なんだその力は……！」

呻きながらインキュベーターは魔力弾を連射した。だがそのことごとくは、まどかの纏う金色の輝きに消し飛ばされる。無表情だったキュウベえの貌が震え、醜く歪む。

「それが……「恐怖」よ、インキュベーター」 まどかは力強い瞳でキュウベえを見据える。「心を持たずに生まれたあなたたちが、初めて感じた「感情」よ！」

「バカな！ 認めない！ 宇宙のエントロピーを制御する、僕たちの機能を、誰にも邪魔させはしない！」

口腔から、触手から、四方八方から魔力光を、まどかを狙い放つ

インキュベーター・ガタノゾア。その全てを受け止め、かき消し、まどかが立ち向かう。

「私たちは今日を守るために、命を賭ける。

私たちは明日を共に築くために、希望を捨てずに戦う。

私たちは、生きるために――

勝つ！！！！」

まどかの拳の一撃が、小さなその一撃が、インキュベーター・ガタノゾアの殻を割り、砕き、その全てを破壊した。

溢れる魔力が、絶望の輝きが、大きく弾け、炸裂した。

（まどか――君は宇宙のエントロピーを左右する存在ではなく、宇宙そのものだというのか！？

君の喜びが、怒りが、悲しみが、願いが、希望が、

宇宙そのものだというのか――！）

概念に帰していく意識の中で、キュウベえは喘いだ。

（認めない！　認めない！　認めなああ――……）

中学の方向から高く上がる爆発の輝きを見ながら、詢子は目を伏せた。

「あの時あの娘は……まどかは死ぬつもりだったんだ。私はそれをわかってて行かせてしまった……見殺しにしたんだ……」

きつく握られた拳。かぶりを振って、詢子は杏子たちの元へ向かう。

見れば、杏子はさやか劍を携えていた。

「杏子ちゃん、それは……」

「魂だよ、アイツの。」

ソウルジェムが砕かれても、残ってたんだ。

あたしは、アイツの魂を守りたい。大切な人を助けたかった、みんなを守りたかったさやかの魂を、継いでいきたいんだ。

……アイツの友達だった、まどかのためにも」

「まどかの……？」

いぶかしむ詢子に、杏子は笑いかける。友を亡くした哀しみも一緒にして。

「あんたの娘は、あんたを泣かせるようなことをするのかい？」

ほむらだって、マミだって生きてたんだ。まどかだって、きつと……」

包帯だらけで横たわるほむらとマミを見やり、詢子も微笑う。苦しみも哀しみも堪えながら。

「そうね……」

決して希望は消えない。そう物語るようなまどかの優しい笑顔を思い浮かべ、詢子は暗雲の晴れた空に呟く。

「帰ってくるわよね、まどか……」

廃墟に置いた弓矢を背に、まどかは独り、何処かへと歩み去っていった。

—MAGICAMAN X3 終

C part:SHINE(少女が概念を越えるまで)(後書き)

オマケ

キユウベえの第2形態・第3形態は、某所のキユウ支配者タグと、
とある超人の平成3部作第1作を参考にさせていただきました<><
あと、大して活躍しないまま最後にこっそり生き残ってたマミさん
ですが、
次作では凍らされてマミられてますので、ご安心ください。

拙い作品ですが、読んでいただけたなら幸いです。

最後に。

I本先生っ、ごめんなさああああああい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7770t/>

MAGICAMAN X3 -SAYAKA'S ATTACK-

2011年10月8日18時10分発行